

「父親の実家が山内町にあり、幼少期に度々訪れては、豊かな自然を体中で満喫したんです。それが僕の絵の原点かな。」草場さんの活力の原点を探ると、それは幼少期の経験に行き着く。豊かな環境の中、絵を描く楽しみを覚えて育った少年は、逸材がひしめく芸術の名門、日本大学芸術学部へ進学し、本格的にあらゆる芸術を学ぶことになった。

「随分順風満帆にやって来られたんですね」と問いかけると、「そんなことはありません。周囲のクラスメイトたちは皆、自分の道を見つけては中退して去っていき、それが勝者の証のような世界。僕は自分の行き先が見えずにいたんです。」だから、草場さんは、彼らが見つけたような自分の道を探すため、大学三年で学校を離れ、世界を巡る旅に出た。いわゆるバックパッカーとして。約20ヶ国を巡った草場さんは、導かれるように中国の敦煌(とんこう)に辿り着く。

「そこには、1000年に渡り描き続けられた仏壁画。時代によって技法は違うが、伝えたい主題や文化は変わっていない、そのしたたかさに感銘を受けました。」草場さんの口調が強くなったのがわかった。

「例えば、現代のウォルト・ディズニーは、自由や愛というアメリカの原点を、子供にもわかるように自然に浸透させる役目を担っている。ところが、僕たちの国はどうだろうか？日本らしい精神や、根本的な生命を大切にすることを、時代に沿って伝えることをなござりにしてきているのではないだろうか。」

「これぞ日本人らしいという、思いやりや礼儀のある精神を持った生命を次世代へ繋ぐことが、現代社会を生きる大人の「使命ではないか。この『伝承する』を僕の生涯の進むべき道にしよう、そう感じたのです。」彼の「大いなる田舎者」の精神は、この旅によって培われたのだ、そう確信した。

## 「生きる」を知る、 「我が道」を得る

山内町で昔、盛んに採石されていたという「三間坂石」。独特の質感を持つこの石は、美術館の一角にあり、草場さんの精神が宿っているような存在感を放つ。湧き出る水は、迷うこと無く歩み続ける草場さんの心中のように澄み切っている。